

みみタロウ

にほんご ばんご じょう
日本語版 ☆121号 2016年12月

しがけんこくさいきけい ぼらんていあくろーぶ 「みみタロウ」
滋賀県国際協会ボランティアグループ「みみタロウ」
おまつし はま びあさ おうみ
大津市におの浜 1-1-20 ピアザ淡海 2F
Tel/Fax : 077-523-5646
E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp
URL : http://www.s-i-a.or.jp
f : https://www.facebook.com/siabiwako

「かんちゃんの小さな家」

今回のみみタロウは、子どもや若者の居場所「ホットフィールド かんちゃんの小さな家」(近江八幡市)を主宰する佐子完十郎さんと、ボランティアスタッフの廣川イヴィさんにお話をお聞きしました。



佐子さん 2年前、教職を退職後、以前からの社会福祉士としての活動を前進させ、「かんちゃんの小さな家」を自宅の一角に開きました。ここでは、子どもや若者が、何か困ったことがあるとき訪ねていただく所。子どもたちのパートナーとして、サポートします。また、どなたにも参加していただける交流会、子どもたちの勉強サポート教室、相談の日も設けています。ぜひ、皆さんも気軽に立ち寄りください。 <http://www.kantyankyousitu.com/>



イヴィさん 「かんちゃんの小さな家」の多文化交流活動で通訳などお手伝いしながら、私自身も力をもらっています。

ここで私が気に入っている点は、日本人も外国人も年齢も関係なく、一緒に受け入れているところ。交流会もイベントではなく、普通の家で普通のおつきあいができるところです。卵焼きを作りながら、日本人のお母さんが外国人のお母さんに学校のことを教えてあげたり、また反対に、地元の人々が初めて外国人から母国の料理を教わることもあります。なかなか人に言えないような悩みを抱えている人も、何か一緒にしながらなら、少しずつお話できることも。最初、同じ国同士で固まっていたけど、一緒にご飯を作りながら自然と国籍に関係なく入り交じっているのを見ると、皆さん意味のある時を過ごされたのだなと嬉しくなります。外国人も日本人も、なかなか普段の場でふれあう機会は、ありそうでないもの。なかには「日本人の家は初めて」という方もいらっしゃいます。

心に引っかかっていることを打ち明けたり、「またここで話したいな」と思えるような、人とのつながりがたくさんできるのが「かんちゃんの小さな家」。ありのままの自分に心を解放できる「居場所」として、ぜひ利用していただきたいと思っています。

私自身は10歳の時、ブラジルから家族で来日しました。当時は、ブラジルの学校と違うことだらけの日本の学校に随分戸惑いました。上履きをはいたり、かわいいお弁当を持ってきている周りの友達に「合わせなきや」という思いで精一杯の毎日。言葉も勉強もわからないことだらけで、必死で黒板を写しては、家で祖父母に教えてもらいながら「みんなについていかなきゃ」と頑張りました。一つの転機になったのが、中学2年の夏休みの作文が市の大会で入賞したことです。そうして、日本語を習得できたことで言語を学ぶ楽しさを知り、高校では英語を、そして大学でも英米語学科を専攻しました。高校時代、外国人生徒の私を気にかけてくださったのが佐子先生です。

卒業後は旅行会社の勤務を経て、市役所でポルトガル語の通訳の仕事を始め、それまで日本社会の中で育ってきた私にとって新しい世界への扉となりました。自分はブラジル人なので、ブラジル人のサポートができることと安易に考えて就職したのですが、ポルトガル語は勉強し直さなければならないし、ブラジル人にハグされて戸惑ったりするなど、すっかり日本人になっている自分に気づかされました。仕事では、人をサポートすることの重さと同時に、喜んでいただけることにやりがいも感じ、私の人生にとって大きな意味をもった2年半でした。そして沢山のブラジル人のおおらかさにふれていく中で、自分自身も柔らかくなり、無くしそうになっていたアイデンティティも取り戻せたように思います。

今は国際関係の仕事をしています。「かんちゃんの小さな家」では、仕事では体験できない自由な発想の活動を楽しんでいます。そして、これまでの仕事の経験や多くの素晴らしい方々との出会いなど、すべてが結びついて自分の糧となり、少しずつなりたい自分に近づいているような気がします。私を育ててくれた滋賀の人たちとつながっていくことが、私の成長の源。外国人も日本人も共に楽しく暮らせる地域作りに役立てよう、仕事も「かんちゃんの小さな家」の活動も頑張っていきたいと思っています。